

「初めてオペラを観るには、どの演目がいいですか」と聞かれると、以前は迷わず『カルメン』と答えていた。どこかで聴いたようなメロディが沢山出て来るし、この名前が魔性の女の代名詞のように使われることから、あらすじもなんとなく知っているからだ。しかしある時ふと気付いたのだが、そこから先に発展しないのである。『カルメン』の作曲家ビゼーは37歳の若さで亡くなったので、惜しいことに他には有名なオペラがないし、フランスオペラ自体がオペラの主流ではないので、興味が広がりにくい。それ以降、私の答えは『フィガロの結婚』と変わり、今もそう確信している。作曲者モーツァルトの曲は、誰でも一曲は知っているだろうし、キャストिंगもそう難しくないで、はずれが少ない。1日のうちに起きるドタバタ劇がハッピーエンドで幕を閉じるというのも万人受けする。そして、ここでオペラを気に入ってもらえれば、モーツァルトの他のオペラを、独語ものでも伊語ものでも紹介でき、そのままドイツオペラにもイタリアオペラにも興味の羽を広げて行く事ができるからだ。

オペラ=歌劇は400年以上前にイタリアで生まれたが、日本ではまだ120年ほどの歴史しかない。しかし、浅草オペラが流行し庶民の娯楽に近づき、NHKが招いたイタリア歌劇団で本場の感動を体験した日本のオペラファンは、少数だが熱烈で、海外アーティストにも一目置かれている情熱と見識を持っている。

モーツァルトは12歳の時、オーストリア皇帝の命を受けて、初めてのオペラ『贋おぼこ娘 La finta semplice』を作曲したが、『フィガロの結婚』は彼が29歳の時の作品だ。原作となったボマルシェの三部作の戯曲は、当時の貴族社会を風刺する内容から、フランスで物議を醸し出していた。ウィーンでもドイツ語訳の出版は許されていたものの、上演自体は禁止されており、その第二部に当たるこの話をオペラ化するに際し、脚本家のダ・ポンテはオーストリア帝国皇帝ヨーゼフ二世の検閲をくりぬけるため、一見たわいもないドタバタ劇に仕上げている。皇帝に一部削除を命じられたり、紆余曲折の末、1786年に初演されたが、その3年後にはフランス革命が勃発していることを考えれば、上演が許されただけでも奇跡的だと言える。

第一部はすでにバイジェットの曲でつけられていた『セビリアの理髪師』で(のちに、ロッシーニの同名オペラの方が有名になる)、そこで結ばれたアルマヴィーヴァ伯爵と伯爵夫人になったロジーナのお屋敷が、第二部『フィガロの結婚』の舞台となる。彼らの縁結び役を果たした褒美に、フィガロはお屋敷に雇われ、伯爵夫人の小間使いのスザンナと結婚する運びとなる。この家に代々伝わる初夜権(使用人の結婚初夜の相手を伯爵がする権利!)を、アルマヴィーヴァ伯爵自身がロジーナと結婚する際に廃止したものの、彼はスザンナに特別目をかけているため、その風習を復活させようと目論む。そこに女性ならば全員ときめいてしまうという小姓ケルビーノや他の使用人などがからみ、散々悶着を起こした末に、伯爵は伯爵夫人に許しを請って、すべてが円く収まるというあらすじである。

使用人達が協力して最後に主人を負かすまでの過程は現代人の私達にも小気味いいが、史実に忠実な王道の演出を楽しんだ後は、現代に置き換えた演出で冒険するのも面白い。例えば2010年3月にバーゼル市立劇場で、ゲールデンによって新演出された『フィガロの結婚』は、現代の、例えばハリウッドの高級住宅地

での1日の出来ごととして読み替えられ、それが音楽にもストーリーにも悪影響を与えず、現代人の私達に身近な話として楽しめる仕上がりになっている。不可解な解釈もないわけではないが、観終った後にほんわりと幸せになれること請け合いです。

同じオペラでも、手がける歌劇場によって新しい体験ができるので飽きないのだが、このバーゼル市立劇場は、そういう意味で現在目が離せない存在だ。スイスで一番有名なオペラハウスと言えば、チューリッヒ歌劇場だろう。2007年に初訪日を果たし、2015年には二度目の訪日が囁かれている。一番大きな劇場はジュネーブ歌劇場だし、小ぶりでも質の高いローザンヌ歌劇場も2008年に訪日している。それらの劇場を差し置いて、バーゼルはスイスの歌劇場として初めて、それも2009年、2010年と2年連続で、ドイツのオペラ専門誌『Opernwelt』選出の最優秀歌劇場に輝いているのである。それは、2006年から総支配人を務める演出家ジョルジュ・デルノン功績による部分も大きい。日本人の教え子も多い有名な声楽家ジュリエット・ピーズの息子としてベルンで生まれた彼は、ピアノと作曲を勉強した末に演出家になり、ルツェルン、コーブレントツ、マインツの劇場支配人を経て、バーゼルに赴任して6年になる。バーゼル市が上海市と姉妹都市関係にあり、バーゼル観光局が上海万博に全力投球していた時期に、唯一彼が訪日に向けてゴーサインを出してくれていた。その後、この劇場にはツアーのオファーがどんどん集まるようになってきたが、1番乗りだった日本のために、2013年6月後半に初の日本ツアー実現に向けての最終調整段階に入っている。また、その企画から派生して、今年の11月には同じくモーツァルト作曲の『コジ・ファン・トゥッテ(女はみなこうしたもの)』が、バーゼル市

音楽の処方箋

文/中東生



第3回 オペラへの誘(いざな)い

立劇場とびわ湖ホールの共同制作として、デルノンが演出し、バーゼルに先駆けてびわ湖ホールで日本人キャストによりプレミアム上演される。そして、2年続けてモーツァルトのオペラをやったのなら、2014年にも、現地バーゼルの言語である独語のモーツァルトオペラ『魔笛』をやる、という企画も持ち上がっており、スイスと日本の文化交流が深まっていくのが楽しみだ。

バーゼル市立劇場は普通、舞台装置の保管などの問題からあまり再演をしないが、この『フィガロの結婚』は満場御礼が続き、3年目の今年もプログラムに含まれており、3月18日を皮切りに、バーゼルでの5回の再演を経た後、すべての舞台装置は日本へ向けて船で出発する。公演地としては現在のところ、愛知県立芸術劇場、大津びわ湖ホール、富山オーバードホール、東京文化会館、大宮ソニックシティ、札幌kitaraホールが候補に挙がっている。もしもオペラを初体験したい衝動に駆られたら、日本語対訳つきのCDやビデオ、DVDで是非一度、このオペラを全曲お試し下さい。その上で、ライブ体験したくなったら是非、下記の処方箋をお試し下さい。オペラに興味なくても、結婚を控えていたり、夫の浮気に悩んでいたたり、つい移り気になったり、誰かと映画感覚で楽しみに行きたい方にもお勧めです。

"Le Nozze di Figaro" (Mozart) Stadttheater Basel

バーゼル市立劇場『フィガロの結婚』(モーツァルト作曲)

2012年4月27日 バーゼル
2013年6月20日~30日 初訪日ツアー